

非授業者のコミットメントを高める校内研究の可能性

学籍番号 169968

氏名 山中 佑介

主指導教員 家近 早苗

1. 問題と目的

社会構造の急激な変化に伴って、学校の在るべき姿や社会から求められる役割が大きく変化する今日、「学び続ける教員」の育成と「チームとしての学校」の確立に資する校内研究の意義が見直されている。しかし、実習校においては、教員の入れ替わりや業務の多忙化の中で、本来は手段であるはずのこれらの研究が目的化し、且つ研究推進が一部の教員によって為されることによって、非授業者の意欲や自我関与が低下し、研究授業での学びが教員間で共有されにくいという問題を抱えていた。以上のことから、本実践研究は、①効果的な研究授業の実施と校内研究の運営について検討し、研究組織を活性化すること ②校内授業研究に対する非授業者のコミットメントを高めることを目的と設定し、校内研究の中核たる授業研究どのように展開するか、教師同士の共同的な関わりをいかにコーディネートしながら進めていくかについて論述するものとする。

2. 研究方法

研究Ⅰ 校内研究の意識調査

【目的】校内研究に対する、教員の実態を把握する。

【方法】実習校教員のうち、高学年研究授業に参加した16名の教員を対象にアンケートを実施する。

問1と問2は、4件法で、問3は5件法で回答を求める。質問は問1「校内研究は必要だ。」問2「校内研究は自身の授業改善に役立っている。」問3「高学年授業研究で最も学びが深まったと感じるのは次のうちどれか。(1 授業づくり(指導案検討) 2 研究授業(授業参観) 3 事後協議会 4 講師の講義 5 特にない)」とし、最も自分に当てはまると思うものを回答させる。

【結果・考察】問1及び問2の結果から、多くの教員が校内研究は学校に必要なものであり、同時に自身の省察の機会と捉えている一方で、問3については回答結果に散らばりが見られた。検討の結果、実習校の授業研究においては、指導案検討に関わるか否かが、非授業者のコミットメントに影響を与え、教員間の学びに差を生じさせる要因になっているということが整理された。

研究Ⅱ 非授業者の参加意欲を高めるためのツール開発

【目的】非授業者の授業研究へのコミットメントを高めるために、研究組織に着目した新たな授業研究の方法を開発する。また、非授業者が指導案検討段階でどのような行動を取ればよいかをわかる指針を示す。

【方法】授業研究を進める組織をそれまでの「学年部会」から「縦割り部会」に再編成する(モギソーの開発)。非授業者の指導案検討段階での行動の指針を示す為のルーブリックを作成する。

【結果・考察】報告者が「全教員を各学年部会混合の縦割りの組織に再編成して、指導案検討を進める」という提案をし、研究部会での協議を経て、平成29年度から実施されることが決定した。「モ

ギソー」や「校内研究ルーブリック」が研究部会全体の話し合いの中で生まれたことに加え、教員間で問題意識を共有することや、それにもとづいて新たな取組みを協働的に創り出したことに、教員のコミットメントの高まりを見出すことができた。

【研究Ⅲ】教員の思いを校内研究に還元するための研究部会への関わり

【目的】教師の研修へのコミットメント低下の原因がどのような点にあったかを明らかにし、得られた意見の研究への還元を図る。また、研究部会の部員が自ら校内研究へと参加することを促進し、その為の効果的な研究部会のコーディネートについて検討する。

【方法】研究部会に所属する者を対象に半構造化面接を実施する。また、(1)組織体制の改編(2)研究部会の進め方の工夫(3)研究部員の自主性が発揮できる風土づくり(4)初任期教員の学習会「Hope」の実施によって、研究部会のコーディネートに介入する。

【結果・考察】インタビューで得られた教員からの発言を21個の概念をさらにカテゴリー化し、関係を考察した。そこから、「教員個々に対するアプローチ」と「組織に対するアプローチ」とを両輪で進めていくことの重要性が理解できた。

【研究Ⅳ】非授業者のコミットメントを高める校内の実践（校内研究ルーブリックの活用と「モギソー」の実施）

【目的】授業研究を進める教員組織を再編成し、指導案検討段階における教員の関わりを改善（「モギソー」を実行）する。また、研究部会が開発した「校内研究ルーブリック」を用いることで、指導案検討段階における非授業者の参加意欲を高め、積極的な情報獲得を促す。

【方法】「縦割り部会」を編成し、校内研究ルーブリックを活用しながら、指導案検討を進める。

【結果・考察】3回の授業研究を「モギソー」によっておこなった。効果検討の結果、「研究部への評価」と「授業研究参加に関する教員の自己評価」が高まったことが明らかになった。

3. 総合考察

本実践研究から、非授業者のコミットメントを向上させるためには、①教員間の経験や意欲の差異を解消したり、その差異を活かした取組みを実施したりすること、②研究授業についての情報を事前に共有できる仕組みや環境を整備すること、③新たなツールの開発や組織の改編によって、マンネリズムを打破すること、④研究主任等の推進リーダーが独断的に研究推進にあたるのではなく、教員の「共同的な営み」によって進行することが必要であることが明らかになった。これらは先行文献に示された内容とも一致するものであった。

また、これまでの実践から非授業者のコミットメントを高めるには、研究組織に対するアプローチと、教員個々へのアプローチをうまく関連付けながら、これらを両輪で進めていくことが重要であるということが理解できた。

今後、非授業者のコミットメントの向上が、彼らの力量形成にどのような影響をあたえるのかという点について明らかにするためには、教員への追跡調査が必要であり、継続的に取り組んでいく中で、追跡すべき課題であるといえる。

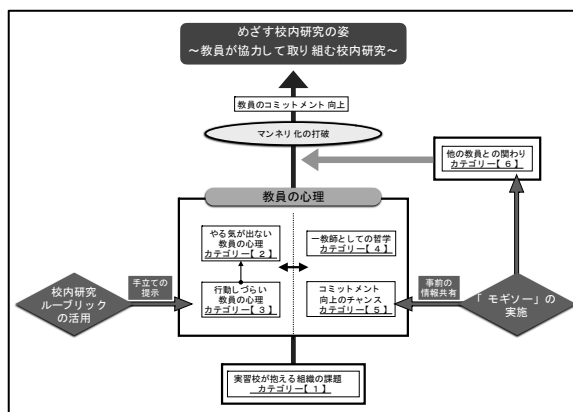


図 非授業者のコミットメントを高める校内研究の可能性